

- (1) 主題名：相手の気持ちを考えて 2-(3) 信頼・友情
- (2) 資料名：ぜったいひみつ 出典：荒木紀幸著「モラルジレンマ資料と授業展開」
- (3) 本時のねらい：転校する友達の「お別れ会」のことを「話した方がいいか」、「話さない方がいいか」について、お互いの考えを交流し合うことを通して、友達を大切にしていこうとする意欲を育てる。

自分と関わりのある人すべてが、自分と同じ思いになるわけではない。「相手に考え方を考えてもらう」など、相手に変化や理解を求めてそのことがうまくいかなかった時、人は心が乱れ、不安定になる。

人は、自分から相手を理解し、信頼する関係を築こうとすることで、良好な人間関係が築かれていくことを学ばせたい。(指導案より)

アンケートより 質問①、友達は大切である。

とてもそう思う93%、そう思う7%。・・・(つまり100%)

質問②、あなたにとって友達とは。

一緒に遊んでくれる。一緒に考えてくれる。相談にのってくれる。

勉強で困った時に教えてくれる。

質問①の数値、質問②の言葉、皆さんはどう見ますか？これがK先生の学級です。



この学級の聴き合う眼である

☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。(時間は時刻)

【掲示物にでるのびのび感】

教室がますます整然としてきた。ロッカーや掲示物に教師の「こだわり」が見える。前年度から習字の「字」に微妙な変化を感じている。

一人一人が自信をもってじっくり書いている感じがする。「上手い方がいい」に超したことはないが、それよりも、「自分らしく」が大切にされている。認められるという行為に裏付けされたそれぞれの「力作」であることを感じる。



【休み時間の風景】

とても和やかである。ちょっとしたゲームで、笑顔で楽しんでいる仲間。一人で本を読んでいる仲間、一つの本でつながっている仲間、様々である。この学級をモデルにしたい。いつも思う、「安心」できる教室である。



11:35 淡々と始まる

教師：道徳は心を耕す授業だよ。始めよっか。



授業者の範読で前半部分を読む。食い入るように資料を見つめ、教師の音読に聴き入る子ども達。

11:44 前半部分の内容の要約。子ども達とお話の内容を確認する。途中、言葉の重なる子どもの発言を停止させた。しかも、教師から「ごめんね」とさりげない小さい言葉が交わされた。さりげなく、当たり前前に教師から気遣いの言葉が交わされていく。子どもはふてくされる様子もなく、次へ進む。これがK先生の日常です。



11:48 後半部分を読みお話の全体をまとめる。



11:56 教師：「困っている人がいるね？どうしたらいいと思う。」主人公のよしえの困り感についてグループに下す。聴き合うである。



「言った方がいい」「言わない方がいい」グループの中でそれぞれの考え方が交流される。決められる者もいる。決めきれない者もいるが前提である。

12:03 「話した方がいい」「話さない方がいい」「分からない」



子どもの困り感を察した授業者は、「選べない」という選択枠を設定した。結果3名の子が「選べない」を選択した。選べない理由を二人の女の子が話してくれた。



「さみしい思いをさせたくない。」「つらいと思う。」「無視されて、いじめられていると思ってしまう。」などであった。この発言の「いじめ」という言葉に数人の子どもが反応した。さらに、この後一人の女子は「絶対に教えた方がいい」しつこく、渾身の言葉で語っていた。この子の反応に、これまでの学校生活で、なんらかのつらい経験が自分にあったことを察することができる。彼女の体験に覚えがあるのだろうか、仲間達も気づかいないながら聴き入れている。



「話さない方がいい」理由として、
「のり子さんがびっくりしなくなる。」
「クラスのみんを裏切ることになる。」
「楽しみが少なくなる」など。



「選べない」を選択した女の子から思わぬ発言が出た。

「話さない方がいいと言える人たちは優しいと思う。」さて、この発言どう受け止めますか？「私は選べないので優しくない人なんではしょうか？」。仲間の深い心の奥を気遣っているのでしょうか。女の子の「心の葛藤」は、実はクラスの誰の心の中でもあったと思うのです。

「選べない」は、すでにその子の心の中に「葛藤」が生まれているのです。ジレンマは一人一人の心の中で起こる「迷い」なのです。私たち教師は、一度どちらかを選択させ、「そう考えた理由」を交流させる中で「ジレンマ」を感じさせようとするが「選べない人ほど葛藤している」ことをぜひ分かってほしい。

リフレクションシートNo.87、国頭中学校 M 先生のシートも是非一読してほしい。

12:16 「話した方がいい」「話さない方がいい」「分からない」「選べない」「どちらも間違いではない」

子ども達は葛藤中である。教師：「どうしたらいいんだろう。」教師は最後のグループでの話し合いの交流を設定する。



12:20 【授業終末】

問い：今日の学習を通してどんなことを考えましたか。ワークシートにまとめる。

話し合い（対話）を先行したからだろうか？子どもたちの鉛筆が気持ちよく動く、仲間との対話で自分の考えや意志がはっきりしたのだろうか。

最終末、教師：結局みんな誰も傷つけないんだよね。…

この教室で一番に、「誰も、一人も傷つけない。」と思っているのは、明らかに担任である。

K 先生授業公開ありがとうございました。今年度すでに3回目の授業公開になりますね。感謝します。このクラスから、我々教師が「学ばせてもらう」ことがいっぱいあります。しっかりと聴き合う眼。気遣う言葉、譲り合う、支え合う等。先生は謙虚に「まだまだです。」とは言いますが、その教師の謙虚な姿勢が子どもたちに映し出されているのです。素敵なクラスです。



【3枚の写真】

右の3枚の写真、奥間小学校の校長室前のローカと、校長室の壁に掲示されている子ども達の作文です。「国語の『書く』ことが本校の課題である。」と校長先生が5年後の自分をテーマに全校生徒に書いてもらったそうです。本校の課題を踏まえしかも、書かせるだけでなく掲示することによって賞賛、激励する。まさに全職員での共通実践ですね。



職員室には、1年目の先生から臨時教諭まで様々です。先生方の個性やこだわりもあると思います。「私」なりにから「私たち」なりに、さらなる奥間小の同僚性の高まりに期待します。

国頭学びの会ゆい